

ミュージアム研究員紹介

岸本年郎准教授

岸本年郎



絶海の孤島、小笠原諸島聳島にて調査する



シマツチケシハネカクシ
Dictyon insulicola Kishimoto 体長は 1mm

およそ 35 億年前に生命は誕生し、その後、進化と絶滅を繰り返しながら、生物は多様化してきました。その中の 1 種である我々ヒトは、他の生物を認識して区別し、これまでに 150 万種を超える生物の存在を明らかにしてきました。しかし、その数は実際にこの星にくらぶ生物のうちのほんのわずかです…。

このように書くと大層なことのようにですが、実際に地球上の生物はとんでもなく多様で、中でも昆虫の種の豊富さは群を抜いています。私が専門に追い求めているのはハネカクシという甲虫の一群です。ハネカクシ科は世界から 58,000 種以上、日本からも 2,300 種近い種が知られる生物界最大の科です。日本産のものだけでも将来的には 5,000 種を超えるだろうとハネカクシ学者は考えています。同じ甲虫ではゾウムシも 5 万種を超える大所帯ですが、ゾウムシは植物を食べるため、植物の種の多様性や、葉や花や実や茎や幹や根などといった食べる部位の多様性に支えられているようです。一方、ハネカクシは植物食のものはほとんどなく、肉食性か腐食性のものがほとんどであるという点で異なっています。

では、なぜハネカクシはそんなに種数が多い

のでしょうか？いくつかの理由が考えられますが、その中のひとつに、個体群の分断による激しい種分化という現象があります。例えば、翅が退化して飛べなくなった虫達は、河川などを渡ることができず、川を境に別種に進化していくことがあると考えられています。ハネカクシの中にも後翅が退化したことで、日本列島内で多くの種に分化した群がいくつも知られています。まず私は静岡を中心とした地域で、こうしたハネカクシの分布状況を詳細に解明し、その成因を探る研究に深めていきたいと考えています。

また、前職の自然環境研究センターでは外来種問題、ニホンジカの増加による生態系への影響の解明と対策、絶滅危惧種の保全というような生物多様性保全に関わる調査研究に携わってきました。これからはここ静岡に腰を据えて、昆虫の多様性の解明と生物多様性保全に邁進する所存です。ミュージアムは自然に学びながら、多くのヒトと一緒に、モノ（標本）を残して、コト（研究）を成す場所と考えています。皆様と一緒に面白いミュージアムを作りたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひします。